

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 285

戦争によるどんな負荷も感じさせることのない

日常生活から発射される「空爆」

評論家の福田和也は連載評論「イデオロギーズ(4)」(『新潮』01・11)の中で、《1999年3月から始まったNATOによるセルビア空爆を、画期的な事件であるとみな》す理由を三点挙げている。一つは、《国連安保理の決議に諮らずに空爆に踏み切った》ことである。《国連決議なしには、大国が連携をしての武力行使を行わない》という従来の慣行を無視して、空爆の参加国に米英仏の安保理事会の常任理事国3カ国を含む《NATO諸国は、安保理の決議の代わりに民族浄化という蛮行を止めさせ、アルバニア系住民の生命と諸権利を守るという、「人権の擁護」を旗印として掲げ、空爆を正当化した。》

画期的な理由の二つ目は、日本と同様に《第二次大戦の敗戦国として、さまざまな制約を受け、また自制もしてきたドイツ》による空爆への参加である。このことは、ドイツが《統一をへて国際社会の正式メンバーとして復帰したということだけではなく、空爆を加えられたセルビアが、大戦中ナチス・ドイツが占領した土地であることを考えれば、第二次大戦の記憶が、少なくともリアル・ポリティクスの力学においては完全に解消されたことを意味している。》

三つ目が、アメリカ軍中心の空爆である。《史上はじめての、情報システムによって完全に統御された爆撃》であり、《たしかに湾岸戦争においても、地上の攻撃目標は軍事偵察衛星によって克明に照準されミサイルが誘導された。だがテレビ報道で大々的に喧伝された状況とは裏腹に、実戦においてはミサイルの誘導がうまくいかなかっただけでなく、イラク側の対空砲火を把握しきれなかったために、撃墜された航空機も少なくなかった。コソボ空爆においては、実戦から得た教訓を生かして、その欠点がほぼ完全に克服された。セルビア側の対空攻撃施設は、完璧に排除をされ、爆撃機は事前に克明にシミュレートされた航路を飛び、指示された地点でミサイルを放てば、確実に目標は破壊された。ベオグラードの中国大使館が「誤爆」されたことに、中国側がいきりたったのは、余りにも水際だった、これまでの戦争の常識を変えるような攻撃の中での唯一の「誤爆」であり、そこに故意しか感じとれなかったからだろう。》

偵察衛星を中心とする情報体系によって統御された戦争は、また、安全な戦争でもあった。二ヶ月以上に渡ってほぼ毎日空爆を行い、絶大な空爆の効果をあげたにもかかわらず

らず、NATO側の損害はほぼゼロであった。》

アメリカ軍を中心とするセルビア空爆によって、「偵察衛星を中心とする情報体系によって統御された戦争」が完全に確立されたということだ。後は、その空爆の精度の問題ということになるのだろう。その精度も当然ながら、今回のアフガン空爆でかなり高められたのだろうが、いくら精度が高まっても、攻撃目標が市街地に置かれている場合は、周辺の民家等に累が及ぶことは想像するまでもない。しかし、そこでの問題は周囲に累が及ぶことにあるのではなく、周囲に累が及ぶことを前提とした空爆の実行の中で、実行者たちにそのことが目撃されないために、自分たちが行う空爆によって引き起こされる影響への想像力が封じられているところにある。つまり、ハイテク戦争への突入によって自らの血が流されなくなるにしたがって、空爆もまた、血が流されない戦争であるかのように思い込まれていくということだ。攻撃目標の中にもはや人間が蠢いていることが、ますます見えなくなっていくのは必然である。「戦争の常識を変えるような攻撃」は当然、戦争に対する人間の意識をも変えていく。

《イタリアの、アドリア海に面した、ヴェネツィアに程近い基地から空爆に参加をしたアメリカ軍のパイロットたちのなかには、家族を呼び寄せる者たちもいたという。朝、家族に送られて宿舎を出て、基地から発進をし、セルビアにミサイルを撃ち込み、帰投し、家族とともに食卓を囲み、イタリアワインをグラスに注ぐ。語弊があるかもしれないが、旅客機のパイロットと変わらない、むしろより気楽かもしれない境遇において、「戦争」が行われたのである。それは、史上はじめての、まったく手を汚すことの無い、「きれいな」戦争であった。通勤をするサラリーマンたちとまったく変わらない生活感覚の中で、行われる戦争。勤務の、あるいは執務の実態として、それは実際にどれほど日常生活と隔絶したものであったろうか。「職業」としての軍人、「ビジネス」としての戦争が、メタファーや説明概念ではなく、まさしく現実になったのである。》

「安全な戦争」としての空爆がもたらす戦争に対する意識の変容は、戦争の中の生活にまで影響を及ぼすことが、以上の個所に示されている。犠牲を覚悟しなくともよい「安全な戦争」が確立されるならば、軍人が家族を呼び寄せることだって充分考えられる。というより、家族と離れた暮らしをする必要はもはやなくなったというべきだろう。このことは、「通勤をするサラリーマンたちとまったく変わらない生活感覚の中で、行われる戦争」を意味するが、突きつめると、もう軍人という「職業」が一般サラリーマンと区別される必要がなくなりつつあることを意味する筈である。それは、犠牲を覚悟しなくともよい軍人の出現が迎える必然であった。ところで、注意すべきなのは、「安全な戦争」は他方に安全でない戦争を前提としていることだ。「安全な戦争」は、交戦国家同士がハイテク戦争に踏み入る軍事力を備えている状態では成り立たず、ハイテク装置と旧態依然の軍備との落差が大きいなかでこそ、ますます可能となってくるのである。

《もちろん、手を汚さない戦争など、地上にあるはずがない。天空で、シミュレーションとも現実ともつかないナビゲーション・システムを指示するディスプレイにもとづき、操作をする操縦士の安全さと確実さのほかに、危険と偶発性が爆発している。爆弾が落ちること、ミサイルが打ち込まれることは、それがどれほど計算しつくされた、限定された標的に対する攻撃であっても、安全であるわけがない。攻撃側にとって百パーセント安全な爆撃行為においても、火薬の破裂がもたらす反応そのものは、つまり地上のレベルでは何が起こるかわからない。レーダー設備を破壊した、その破片が飛散して周辺にいる人間を害することは抑えきれない。セルビアの首都ベオグラード市内には、多数の防空設備がおかれていた。一般市民の被害が数千人に及んだのは当然のことである。さらに戦術的な問題として、攻撃を軍事目標に限ってはいない爆撃の実効性は確保できない。コソボ爆撃の目的が、セルビア側のコソボへの関与をやめさせることにある以上、セルビア政府を屈服させ、できればミロシェヴィッチ政権を転覆させることが望ましい。そのためには、セルビアの軍事力を無効にするだけでなく、電気、水道、ガス、交通機関といった社会基盤自体を破壊し、国民生活そのものを困窮させなければならない。実際、爆撃が一月を越えると、市内への配電は断続的になり、水道も機能を失った。食料は配給によって辛うじて不足をきたさなかったが、生活を破壊された市民の厭戦気分は拡大してゆき、そのためにミロシェヴィッチ政権は、NATOと休戦交渉のテーブルにつかざるをえなくなったのである。》

「安全」で「きれいな」戦争もまた、「手を汚さない戦争」であるわけがない。いや、「安全」で「きれいな」戦争であればあるほど、それに反比例して、「手を汚す」度合いも大きくなっていくにちがいない。つまり、「手を汚す」度合いの大きさにおいて戦争の「安全さ」はより増し、「きれいに」ますますなっていくと考えなければ、とても理屈に合わない。なぜなら、化粧法について語っているのではなく、戦争について語っているからだ。「安全」であるということは相手から全く反撃されないということであり、「きれい」であるということは、地上での破壊や殺戮がシミュレーションゲームのように滞りなく順調に進行し、きちんと整備されていくことであったからだ。

「手を汚す」度合いの大きさの中で戦争の「安全さ」や「きれいさ」が得られているにもかかわらず、攻撃側にとっては手を汚しているという実感がますます薄まっているのが、セルビア以降の空爆であった。人を殺しておきながら人を殺したという実感が希薄な現象がいまの若い世代に蔓延しているように、いまの空爆では紛れもなく自分がハイテク装置を操縦してボタンを押しているにもかかわらず、押されたボタンによって地上での破壊と殺戮に自分はほとんど無関係と思われることが、自分の手を汚したように感じられないことと重なり合っているのだ。

そのような感覚がどこからやってくるかは、はっきりしている。地上での出来事が天

空からは噴煙以外になにも確認できない、いわば目隠しされた密室状態に置かれていることであり、更に精密なハイテク装置に取り囲まれた密室状態の中で、操縦者の役割がボタンを押すだけであるというような、ごく日常的な簡単な操作に限定されていることである。ボタンを押したその先には噴煙以外のなにもも見えないということと、ボタンを押すという日常的な簡単な操作が、戦争に参加していることや空爆によってもたらされる大きな被害に対する罪責感などを吹っ飛ばしてしまうのだ。実際、戦争を遂行しているのはハイテクシステムであって、パイロットはただ単にボタンを軽く押すだけの役割しか与えられていないということになれば、手を汚すも汚さないも、戦争に参加している気分からすら遠いものであったかもしれない。

《爆撃する側にとって戦争自体は、開戦以前にほとんど終わっている。軍事偵察衛星やさまざまな電子監視システム、盗聴装置などから取り込んだデータをもとに作りだした攻撃プログラムを、何度もシミュレーションをした上で、兵員、兵器、兵站の動員をかける。いざ実戦がはじまってしまうと、やるべきことは、戦果の確認をして、それが計画と齟齬していないかどうかを評価することだけなのだ。》

もっとも大きな変化は、実際の戦場に赴く兵員の心情であろう。彼らは、あらかじめ作られたプログラムと、そこにおける機器の操作が正常に動くことだけが確認できれば、ほぼ何の不安もなく、空爆をすることができる。

爆撃される側には、まったく反撃の余地がない。何らかの形で、NATOに被害を与えようという夢想を描くこともできずに、一方的に爆撃をされ、殺され、生活を破壊され、恐怖に怯える。それは、ほぼ日常生活の中にいる、つまりは通勤生活と変わらない環境でミサイルを撃ち込んでいるパイロットの境遇とは、あまりにも異なるものだ。それが「戦争」という相互的な営為において対峙しているとはとても信じられないような。》

《これまで、いかに強力な軍隊と弱小な勢力が対峙をした時においても、前線の兵卒、戦闘員は自分たちの生命を失うという危険を認識し覚悟することなしに戦うことはなかった。戦争が、辛うじてある種の厳粛さを持ち、騎士道や武士道といった倫理体系を育む基盤となったのは、戦場がまさしく、相互的に生と死が交錯する場所だったからである。自分が人を殺すと同時に殺されるかもしれないという死生の境涯があってこそ、戦争における、勇気なり、友愛なりが花開いたのである。》

一方的な爆撃に対する反撃の余地のなさ、といった光景を思い浮かべるとき、そこにはもはや従来の意味における「戦争」が不在となっているのを認めないわけにはいかない。コソボ空爆は「戦争」が不在している状態での一方的な爆撃の地平を、したがって押し開いたものとみなすことができる。これまでの空爆はドレスデンであれ、東京であれ、ハノイであれ、バグダッドであれ、ほぼ無差別に近く、たとえば45年3月10日の東京大空襲では、約1700トンの焼夷弾が投下されて、百万人が焼け出され、死者

は10万人といわれるほど、被害規模は巨大なものであったにもかかわらず、福田和也がいうように、『「人道」的な空爆であったと認めてもいい』と思われるのは、殺し殺される戦争の中で反撃が可能な空爆であったからだ。ところが、コソボ以降の空爆はもはや無差別ではなく、標的を限定した、したがって被害規模も格段に少なくなったにもかかわらず、もはや「人間の顔をした」空爆とみなされないのは、爆撃される側からの反撃が全く届かないハイテク戦争になってしまっているからだ。より一層残酷なのは、空爆そのものの残酷さではなく、空爆そのことが爆撃する側に意識されなくなっていることである。

第一次世界大戦にはすでに、個人的倫理が入り込んだ戦争のもつロマンは失われつつあった。第一次大戦時にそれまでの戦争の質的転換を図った、『戦争にたいする科学技術と、総動員体制を作り上げた社会政策という、テクノロジーと諸制度の大規模な導入』の完遂された姿が、コソボであった。究極の戦争が自国民の被害が皆無で、しかも敵方に絶大な打撃を与えることにあるなら、コソボの空爆はそれをやってのけたのである。《第一に自国民の犠牲がほとんど出ないのであるから、政府への強い批判も反発もない。さらに、軍事作戦と同等に組み立てられた世論工作によって参戦世論を作りあげ、戦場で報道される映像については徹底した操作をし―ベトナム戦争の失敗は何よりも現地の惨状がテレビを通して無制限に流れこんだことにあった―、敵方の残忍さを強調する。人的存在のリスクなき作戦技術と、不快な情報を封印した正義の戦争というスペクタクルを社会的に捏造することによって国民にまったく戦時にいるという自覚を与えず、つまりは戦争が社会にあたえている負担や脅威を感じさせることなく戦争を遂行できるような、軍事的、社会的技術が発明されたのである。》

さて、このような一方的な爆撃は、アルバニア系住民の生命と諸権利を守るという、「人権の擁護」の旗印を掲げて行われた。つまり、他の「人権」をもって、セルビア国民は、「一方的に爆撃をされ、殺され、生活を破壊され、恐怖に怯える」というかたちで、自分たちの「人権」を侵されなくてはならなかったのだ。アルバニア系住民の「人権」を侵害しているセルビア人たちは、NATO軍によって自分たちの「人権」を侵害される裁きを下されている図式として捉えることができる。しかもこのNATO軍が行使する正義に逆らう力は、セルビア側にはない。このことは、アメリカを代表とする大国とセルビアのような弱小国家のいずれに正義の分はあるかという以前に、その圧倒的な格差の中で正義が存立する基盤そのものが消失していることを浮上させている。

この図式の中に福田和也は、『弱者を顧慮なく攻撃するような家庭内暴力や児童虐待、小動物の迫害』と同質のものを覗き込み、『これらの陰湿な暴力は、コソボ的な空疎な、ヴァーチャル化した大義ときわめて緊密な関係をもっている。なぜならば、大国がセルビアに加える暴力を抑制しえるのは、この「人権」という空疎なエンブレムの、世界世

論における見栄えの問題だけであり、テレビ画面に映らず確認されなければどうでもいい、つまりは戦う当事者同士の相互的な敬愛とは無縁であるのと同様に、児童虐待や小動物の殺戮は、公的露出だけがその歯止めとなっているからであり、そこから逃れている場所でこそ、横行をしている。》という。

更に、《戦争が、社会政策と、軍事テクノロジーの発達によって、日常化され、職業化された》ことと、遺伝子テクノロジーによって人間が動物化されたことは、《完全に並行するとともに、同じ一つの出来事であり、また《コソボ紛争において構成されたようなテクノロジーと社会システムの結合体は、それ自体がきわめて自律的な力をも》つことによって、《このシステムは、実はアメリカといった大国によっても支配しコントロールができない水準に、とうに立ち至っている》ために、《完全にコントロールされ、シミュレートされたはずの軍事システムの大系は、中枢への攻撃を受ければ防衛機構のアナーキーの源になりかねず、超高度に情報化された経済機構は、入念な局所への攻撃によってあっけなく脆弱さを露呈する可能性を秘めている。》ことが、今回の同時中枢テロによって明らかにされた。

自爆テロリストたちが発している問いは、空疎な「人権」や「正義」を振りかざして、爆撃を行使する大国の圧倒的な力を前にして、なんの反撃の余地もない弱者にできることはあるか、あるとすれば、それは一体なにかということだ。そしてこの問いは、次のような世界の中にたえまなくマグマのように沸騰している。《日常と戦争の区別がないような空間。そこではまず社会を構成することができず、正義もまた存在をしえない、ゆえに常に弱者が殺生与奪の権を他者に委ね、恣意的な攻撃の対象となるような世界である。しかも、もっとも厄介なことは、このような空間は、それを意識的に作った者も転回したり、変質させたりすることは出来ない、ということなのである。そしてひとたびテクノロジーによってコントロールされた諸制度が暴走しはじめるとすれば、それを統御しているつもりの側も、それに抑圧されている者も、それを止めることも、壊すこともできない。》

核兵器が発明され、主要な大国がそれを所有したときに、もはや戦争や暴力では、世界は変えられない（国内の転覆はできても）と云われた。だが、今日、暴力は世界を変える可能性を帯びつつある。その暴力とはいってもなく、軍事的、情動的テクノロジーと社会的、政治的、経済的諸制度の組み合わせとして成立している複合体への一撃である。その一撃は、世界を変えられる可能性があり、グローバリズムに反対をするアナキストやユナボマーのようなテロリストは、高度に完成されたシステムの持つ両義性に明敏にも気づいている。》

おそらくもはや暴力しか世界を変えることはできない、と絶望的に思わざるをえないところにまで、あらゆる弱者は追い詰められつつあるようにみえる。《「事実上の平等」

のないところに、正義を主張し、要求できるのは暴力のみである。その結果が、いかに貧しいものであっても、しかし何の主張もしないということは在りえるだろうか。それがただの要求にすぎないとしても。》と福田和也が最後に締め括るとき、憎悪にはより大きな憎悪を、暴力にはより大きな暴力を、という狂信へと身を投げ込まなければ、生きていくことはできないほどのトラウマを手出しのできない空爆から刻み込まれた者たちの、連綿と打ち続くテロリストへの変貌である。軍事システムや経済機構がもはや誰にも統御できないほどに高度に完成されていくにしたがって、その中枢への攻撃も高度にシステム化されるに至るのは不可避だ。圧倒的な力に対する反撃の余地が外部になくなったということは、反撃は内部に移行したということである。外部からの反撃が不可能になれば、圧倒的な力の内部で反撃するほかなくなるのは当然であり、しかもその反撃は致命的であることによって、不可能になった一方的な戦争形態は、自爆テロと化する空爆を対極に、意に反してというより、必然的な成り行きとして産出させずにはおかない。

02年2月11日付の朝日新聞によれば、今回のアフガン攻撃で米本土から作戦指揮をとることが可能になったために、作戦を直接指揮する米中央軍司令官は、アフガンよりフロリダ州の司令部にすることが多く、戦況の即時把握はITを駆使した指揮統制システムの開発によってもたらされた。出撃拠点となったアラビア海の空母とワシントンの国防総省は、テレビ会議も可能な秘話装置つき回線で結ばれ、アフガンの戦場とフロリダの司令部は瞬時にデータを交換できるようになった。アフガン作戦で米軍は民間衛星まで借り上げて戦場の画像収集に奔走し、攻撃目標の選定にはコンピュータでなく、ルーペをもった専門技術者が人海戦術であたったといわれるほど、精度を高めて誤爆率を低下させようとしてきた。99年のコソボ空爆以来、米軍は全地球測位システム(GPS)やレーザー光線を使った誤差10メートル前後の誘導式爆弾を多用し、「無差別攻撃」との批判をかわしてきたものの、誤爆によるアフガンでの民間人の死者は約3800人(昨年12月時点)にも上っているとみられる。それは、演算や記憶は得意でも、画像情報を正確に識別し認識する能力に今のコンピューターは欠けているからであり、車両ぐらいの目標なら識別できても、人の区別や追跡には不十分で、民間人と兵士の区別など不可能な軍事技術の限界がそこに浮き彫りにされている。記事は軍事技術の限界の指摘に主眼を置いているが、アフガンの戦場に新型ロボットが登場したことを考えると、今後のハイテク戦争の主役には人間ではなく、ロボットが躍り出ることが充分予測される。空爆のパイロットがますますロボット的な役割しか果たせなくなっていくなら、本物のロボットを登場させることに何の不思議もないからだ。もちろん、そこでの戦争ではロボット同士ではなく、ロボット対人間になるだろう。

2002年2月25日 記